

## 琉球宮古語の再活性化

下地理則（群馬県立女子大学）

本発表では、琉球諸語（奄美語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語）のうち宮古語（そのうち特に宮古島に隣接する伊良部ことば）を対象に、その多言語状況・言語復興に関して、現状の概観と問題提起を行った。

発表は具体的に以下の2点を軸に進められた。

- (1) 宮古語—イントロダクション
- (2) 宮古語の言語再活性化に関する諸問題

(1)については、宮古語の地理・系統・社会言語状況を概観し、発表者の収集した民話音声データを聴衆に聞いていただくことで、宮古語の具体的なイメージを共有した。一般に琉球語というと「めんそーれ」「ちゅらさん」などに代表されるような沖縄本島の言語（北琉球）を想起する人が多いと思われるが、宮古語を含む南琉球諸語がこの北琉球とはほぼ相互理解不能なほど異なる言語であることを示し、また社会文化的にも北琉球と南琉球とで大きな境界があることを解説した。

(2)については、宮古語の中でも発表者がフィールドにしている伊良部方言に焦点をあて、①住民が言語再活性化を望んでいるか、という点や②言語再活性化の方向付け（誰が主導し、どういう目標のもとに行われるのか）について議論した。

まず①の住民の言語再活性化への考え方について、発表者はフィールドワークで知り合った住民の方々の意見を紹介した。ここで特に注意を促したのは、高齢者も若年層も、伊良部方言を「文化財」として残していくことを望んでいる点である。すなわち、方言の使用を目的とした再活性化よりも記録保存を目的とした再活性化を望んでいる。より大規模なアンケート調査を行う必要はあるだろうが、発表者の長期フィールドワーク（半年ずつ、合計1年2カ月程度）の経験から、上記の結果は非常にリアリティを持ったものであると言える。おそらくこの考え方が、住民の大半の考え方を代表していると思われる。

次に②言語再活性化の方向付けの問題については以下のような議論を行った。上記①において、伊良部方言を文化財として保存していくべきであるという考え方は、伊良部方言の使用領域が限定的であることに起因すると思われる。そして、記録保存の過程で、この方言はおそらく実際に使われる言語としての役割を終え、消滅していくであろうと予想される。たしかに現在の住民の意向はこれをやむなしとするものであるが、伊良部方言が死滅したあとの住民はどうであろうか。将来の言語が死滅したあとに、再復興を望むのは非常に困難であるが、世界の少数言語の状況を見てみると、言語がほとんど死滅してしまっ

たあとでも、その言語を、文化的なアイデンティティの柱として掲げる民族は多い。よって、なるべくならば、この方言が死滅してしまわないように働きかけるのも、我々言語学者の役割のひとつではないか、というのが発表者のスタンスである。そのために、たとえば、使用領域を確保できるような政策を立案していくことも重要である、という趣旨の問題提起を行った。